

7 2 時間を生き抜くために

渡沼希 敷田彩乃

エディター 佐藤山葉

想定はマグニチュード 7.3、最大震度 7 の首都直下地震。降下中のエレベーター内で、突然激しい揺れに襲われる。停止したエレベーターから夜の東京の街へ出ると電気は消え、電柱は傾き、崩壊した家屋からは助けを求める女性の声。余震が繰り返される中、街の公共テレビからは緊急地震速報の警告音が響き渡る。家族の安否を知りたい。家の状況を確認したい。しかし電車は止まり、携帯は繋がらない。猛烈な不安。デパート帰りの荷物には食料も水も携帯バッテリーもない。国や自治体の支援体制が整うまでの目安は 3 日間。72 時間を自力で生き残らなければならない。

これは「そなエリア東京」で行われている「東京直下 72hTOUR」の体験の様子である。「そなエリア」は東京臨海広域防災公園内にある防災体験学習施設だ。ツアーでは、タブレット端末を使った防災クイズを解きながら災害直後の東京を再現した街の中を進み、最後に避難場所を見ていく。館内には家族連れが目立ち、特に体験ツアーではアトラクション感覚で参加する子どもも多く見受けられた。防災に関する施設というと難しく思われがちだが、体験・学習ともに子供でも楽しみながら学ぶことのできる内容となっている。

山崎純一センター長は、重要なのは、「災害が起きてからどうするか」ではなく起こるまでの備えが大事であると述べる。災害が起こった後ではもう手遅れなのである。防災を日々の暮らしに取り入れていくきっかけとなるような手軽なものも沢山存在する。例えば、いつもペットボトルの水を一本持ち歩く。一日に必要とされる水の摂取量の 2 リットルには及ばないかもしれないが、これでエレベーター内に閉じ込められた際などの脱水症状は一時的に回避できる。また例えば、少し多めに食材の買い置きをしておく。乾パンや粉ジュースなどのいわゆる非常食を購入しておかなくても、米や水、乾麺や缶詰を家にストックしておけば、少しの間食いつながることができる。これはローリングストック（循環備蓄）という考え方で、非常時の「買い占め」も防ぐことができる。そして忘れがちなのが、家族との連絡手段の確認だ。メッセージを録音することができる災害用伝言ダイヤル（171）など、災害発生時に使用できる手段は存在するが、送り手と受け手の間でどの手段をとるか相談しておかなければ、伝わるはずのメッセージも伝わらなくなってしまう。

東日本大震災は、その被害の大きさから国内外に様々な影響を与えた。被害情報の報道が落ち着けば、いかに次の災害の被害を抑えるか、日本の防災設備は十分なのかでメディアは持ち切りであったし、ショッピングセンターには防災グッズの特設コーナーができた。内閣府によると、今後 30 年以内 M7 以上の首都直下地震が発生する確率は 70%にも上るといふ。この先必ず起こる次の災害の被害を最小限に抑えるためにも、沢山のモノが失われた後での火事場の馬鹿力をあてにするのではなく、全てのモノがそろっている今、少しでも備えを欠かさないことが重要なのではないだろうか。

◆編集後記◆

渡沼希

非常に学ぶところの多い取材、記事作成でした。私自身阪神淡路大震災が起きた兵庫県出身なので、日頃から災害に関しては高い意識を持っているつもりでした。しかしその意識がいかにもぼんやりしたものであったかに気づき、また実際に災害に備えるためにはその意識をどのように生かしていかなければならないのかをあらためて考え直させて頂きました。

この記事がより多くの皆さんに読んでいただければ幸いです。最後に、センター長の山崎純一様、そしてこの記事に関わってくださった全ての人々に感謝して、編集後記を終わらせて頂きます。

敷田 彩乃

災害対策というと、国や行政機関による大規模な対策や発生後の対応がメインだと認識していた。しかし取材を通じ、各個人が自然と日常に組み込む備えが重要で、それが本人の助けになるばかりでなく、全体の負担をも減らすことにつながるなど、知らなかった視点を得ることができ有意義だった。